

# 神功皇后の兵法書「張良一卷書」

金 光 哲

## 第一章 「張良一卷書」入手譚

### 1) 『太平記』の「一卷ノ秘書」

『太平記』<sup>(1)</sup> 卷第三十九、「神功皇后、攻<sub>レ</sub>新羅<sub>ニ</sub>給事」に、

昔シ仲哀天皇、聖文神武ノ徳ヲ以テ、高麗ノ三韓ヲ攻サセ給ヒケルガ、戦利無シテ帰ラセ給ヒタリシヲ、神功皇后、是智謀武備ノ足ヌ所也トテ、唐朝ヘ師ノ束脩ノ為ニ、沙金三萬兩ヲ被<sub>レ</sub>遣、履道翁ガ一卷ノ秘書ヲ伝ラル。是ハ黄石公ガ、第五日ノ鶏鳴ニ、渭水ノ土橋ノ上ニテ、張良ニ授シ書ナリ。

とある。仲哀天皇は、「三韓」を攻めたが、「智謀武備」の欠如から勝利できなかった。このため、神功皇后は「唐」に人を派遣し、「黄石公」が「張良」に授けた「履道翁ガ一卷ノ秘書」を、「金三萬兩」で入手したという。

この「張良」の説話は、司馬遷の『史記』<sup>(2)</sup> 卷五十五、「留侯世家」に依拠する。張良が「一老父」の「履」を拾った縁で、「一老父」は、張良と五日後の「平明」に会う約束をする。しかし、その日、張良は遅れる。次に、五日後の「鶏鳴」に合う約束をするが、その日もまた遅れる。五日後の三回目の約束の日、今度は夜半にならないうちにでかけ、一老父より先着することができた。そこで、一老父は「一編書」を出し、

出<sub>レ</sub>一編書<sub>ニ</sub>曰。読<sub>レ</sub>此、則為<sub>レ</sub>王者師<sub>ニ</sub>矣。後十年興、十三年儒子見<sub>レ</sub>我。濟北穀城山下黄石、即我矣。

と、「黄石」であることを明らかにする。夜が明け、其の「一編書」を見ると、「太公兵法」、つまり、周の文王の参謀、太公望呂尚の「兵法書」であった。

『太平記』と『史記』とでは、内容に違いがある。「履道翁」なる人物は、『太平記』卷第三十九・「芳賀兵衛入道軍事」にも、「黄石公ガ伝ヘシ處、李履道翁ガ授シ道」とある。しかし、『史記』になく、出典は不明である。また、「一卷書」の授受は、『史記』では「鶏鳴」の時ではない。

ともかく、『史記』の記事をヒントにして、「履道翁ガ一卷ノ秘書」（以下「張良一卷書」とする）入手譚が創作された。この創作時、仲哀天皇「高麗ノ三韓」攻撃時の「智謀武備」不足説を創作し、それを前提として、神功皇后による唐への人物の派遣説と、「金三萬兩」との交換説を編みだした。

### 2) 「御成敗式目」の注釈書

鎌倉幕府は、貞永元年（一二三二）、五十一条の武家法「御成敗式目（貞永式目）」<sup>(3)</sup>を制定した。この「御成敗式目」（以下「式目」）に対する注釈は、鎌倉時代から始まったが、室町期に入ると、起請文「祭文」部分の「八幡大菩

(1) 日本古典文学大系『太平記』三、岩波書店

(2) 新釈漢文大系『史記』卷五十五、「世家」、留侯世家

第二十五、明治書院

(3) 日本思想大系『中世政治社会思想』上、岩波書店

薩」の注釈で、「張良一卷書」に言及する注釈書が現われた。

「式目」の注釈書については、池内義資氏のすぐれた研究成果である『御成敗式目の研究』<sup>(4)</sup>があり、そのうちの代表的な注釈書八編を編集した「御成敗式目注釈書集要」<sup>(5)</sup>がある。池内氏の蒐集成果に依拠し、本節では「池辺本」を取りあげ、次節で「岩崎本」を取りあげる。(段落と番号は、便宜的に付けた。)

○「御成敗式目注」(池辺本)——東京大学図書館蔵——

この注釈書は、天文廿三年(一五五四)の奥書がある。

第一段

① 八幡ト云ハ、武道ノ守護神也。天神ハ文道ノ守護神也。此書ハ武家ノ法度ナルホドニ、先八幡ヲサキニシテ、天神ヲ後ニスル也。武ヲモツハラニ立ル時ハ、ウラニ文道ヲ兼ネ、文ヲ面ニスル時ハ、ウラニ武道ヲ兼ル也。一方カケテ建立ナラス。文ハ柔弱也。武ハ剛強也。

② 八幡ト申ハ、応神天王也。軍神ニ請シタテマツリ、鎧ノ袖、旗ガシラナドニ、八幡大菩薩ト書付申ハ、イワレアリ。応神ノ御母神功皇后、三韓ヲタイラケントシ玉フ。三韓トハ、高麗、百濟、新羅也。

③ 此時、皇后軍ヲオコサントシ玉フニタヨリナシ。爰ニ、異朝ヨリ履陶公ト云者、張良カー卷ノ兵書ヲ伝ヘ来ル。而ニ皇后ニ伝ヘ申。以<sub>レ</sub>之、籌<sub>ハカリゴト</sub>ヲ帷幄ノ中ニメクラシ、勝コトヲ千里ノ外ニ決ス。

第二段

① 終ニ三韓ヲ退治シテ后、天下ヲ応神天皇ニユツリ玉フ時ニ、此一卷ノ書ヲユツリ給也。

② 其ノ后ニ応神天皇ノ崩御アル時、此一卷ノ書ヲ残シ置キタラハ、田舎ノ塵トナサン事、アサマシク思召、所詮灰ニ焼ナシテ、腹中ニヲサメテ、死ナントテ、一火トナシテ、腹中ニヲサメテ崩御アリ。

③ 其後、此兵書ナシ。軍ヲオコス者無<sub>レ</sub>便。仍、応神天皇ヲ此一卷ノ書トナゾラヘテ、八幡大菩薩ト號シテ、弓矢神ニ勸請申也。

第三段

○ 其后延喜御宇ニ、此兵書ナキ事ヲカナシミ玉イテ、大江惟時ニ、砂金十萬両ヲ賜テ、異朝ヘツカハシ、此書ヲ相伝シテヨリ以ノ来タ、我朝ニ流布スル也。

第四段

○ 源義家大將軍タリシ時、此書ヲ相伝アルニ、文字ニ叶ハス。其時、大江匡房卿ニ仮名ニ書テ、相伝アル也。ソレヨリ、仮名カキニテ、四十二ヶ條ノ大事ト云ヘル。是歟。

この「御成敗式目注」(池辺本)の同系本には、次の二本がある。

○「御成敗式目註 亦名御成敗式目諺註」  
(慶応義塾図書館蔵)

○「御成敗式條〔式目〕」(池内義資蔵)  
池内氏は、「池辺本」の解題で「講師」について、

本書には所々に問注所秘事、問注所の読<sub>ヲ</sub>様をあげ、問注所の見解を述べる所があるから、その講義をした人士は恐らくは問注所官僚か、その縁者であつたであろう。

と、「問注所官僚か、その縁者」としている。また、解題「総説」で、

式目が制定公布され、それが施行されると、繫争事件に当たって、訴訟人は何れもその

(4)池内義資『御成敗式目の研究』、平等堂書店

(5)池内義資編『中世法制史料集』別巻、岩波書店

主張の根拠を式目条文に求め、裁判官は式目条文に准拠して判決を下すのであるから、司法に執わる幕府官僚はもとより、守護・地頭・一般御家人は勿論、庄園領主も庄官もこれを知っておく必要がある。

としたうえで、「受講者」について、

式目講義の受講者も直接幕府の吏務に執わる幕府官僚に限らない。御家人も公家の人々も亦学問を好愛する教養人もあったであろう。

といっている。これに従うものである。

さて、同系本の「御成敗式目註」（慶応大学本）の奥書に、

右此一本、以<sub>レ</sub>足利講席之裏書<sub>レ</sub>写<sub>レ</sub>之。  
雖<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>問注所之深秘<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>後昆<sub>レ</sub>之  
證本也。

とある「足利講席」とは、室町時代に行なわれた「式目講義」のことである。この奥書から、「足利講席之裏書」のことを「證本」といったことが判明する。

ところで、池内氏は解題「総説」で、「足利講席之裏書」を、受講者が講義内容を「一言隻句と雖もこれを洩らすことなく筆録」した「聞書」とする。これを検討して見る。「池辺本」の奥書に、

右一本、先年以<sub>レ</sub>足利講席之裏書<sub>レ</sub>筆<sub>レ</sub>之。  
不<sub>レ</sub>幾而失却。或人以<sub>レ</sub>其證本<sub>レ</sub>写<sub>レ</sub>之。  
仍借用而、重書写之者也。問注所之一流秘  
中之秘也。豈容易之哉。

天文廿三年<sub>甲寅</sub>八月中旬

とあって、「足利講席之裏書」を「問注所之一流秘中之秘」とする。また、「慶応大学本」は、「問注所之深秘」とするのであるから、これを受講者の「聞書」としてでなく、「問注所」の所有文献と見なくてはならない。つまり、「足利講席之裏書」（「證本」）とは、講師の「講義

録」、ないし「講義メモ」とみるべきではなからうか。

「池辺本」は、「證本」からの写本を紛失したので、ある人の「證本」からの写本を借用し、天文二十三年（一五五四）に、それを転写したものである。また、「慶応大学本」は、慶長十二年（一六〇七）に、「證本」から直接書写したものである。

「問注所」とは、「鎌倉幕府で用いられた基本的な法律用語を解釈説明し、かつ訴訟文書の文例を示した法律書」である『沙汰末練書』<sup>(6)</sup>に、

問注所者、関東諸方沙汰所也。<sub>関東在<sub>レ</sub>之。  
六波羅無<sub>レ</sub>之。</sub>

とあるように、もとは源頼朝によって、元暦元年（一一八四）鎌倉に設置された。その初代執事は、京都から下ってきた「京下りの官人」で、明法家家系の中級貴族出身の三善康信であった。執事のもとに、「執事代」、「寄人」などの職員が置かれた。

室町期の「問注所」は、「室町幕府の訴訟制度を解説した法律書」である『武政軌範』<sup>(7)</sup>問注所沙汰編、「条目事」に、

当所者、為<sub>レ</sub>武家之記録所、仍古今之記録、  
細籠之証券等、被<sub>レ</sub>納<sub>レ</sub>置于此文庫<sub>レ</sub>云々。  
是故、文書紙繆、謀実論、紛失証文等於<sub>レ</sub>  
当所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>評判<sub>レ</sub>之。

とあるように、室町時代には、「問注所」は記録を保存し、案件の過誤や真偽の調査を任務とするようになった。「執事仁昧事」に、

評定衆中被<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>之。先代以来至<sub>レ</sub>当御  
代、多分町野・太田族任<sub>レ</sub>之。是故、善家  
右筆之輩、以<sub>レ</sub>当所<sub>レ</sub>称<sub>レ</sub>本所<sub>レ</sub>乎。

とあるように、室町時代の執事は、初代三善康信の子、二代目康俊を祖とする町野氏、四代目康連を祖とする太田氏が世襲し、問注所を「本

(6) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集』第二巻

(7) 前掲書、『中世法制史料集』第二巻

所」といった。「池辺本」は、この間注所官僚の文献である。

### 3) 注釈書「御成敗式目抄」(岩崎本)

○ 「御成敗式目抄」(岩崎本) —— 東洋文庫蔵 ——

#### 第一段

##### ① 八幡大菩薩

八幡ハ軍神、殊ニ源氏ノ氏神ナレハ請ナリ。取分、此者武家ノ法度規矩、万代ニテ被<sub>レ</sub>行様書ナルニ依テ請給フ。

② 夫八幡ハ或説云、張良一卷書ヲ以ノ故ニ、軍神ト被<sub>レ</sub>崇給フ由アリ。然ハ此一巻書、我朝ニ伝来ノ始ハ、人皇十五代ノ帝、神功皇后元年辛巳、履陶公ト云人異朝ヨリ伝来。

③ 于時、御門喜玉ヒ、相伝シテ此兵法之カヲ以テ、夫帝<sup>（ミコ）</sup>打随ヘ不<sub>レ</sub>給崩御ナリシ事ヲ歎思召テ、新羅、百濟、高麗ノ三韓ヲ打随玉フ。為<sub>二</sub>女<sup>（メ）</sup>躰<sup>（タマ）</sup>如<sub>レ</sub>此ノ事、古今不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>比類<sup>（ヒト）</sup>。剩<sup>（あまつまへ）</sup>、三韓ハ日本ノ犬也ト、彼国ノ大石ニ碑ノ文アリト云々。

#### 第二段

① 而シテ六十年御治世ノ後、太子応神天皇ニ御世ヲ譲リ玉ヒシ時、彼ノ一巻ノ書共ニ奉譲ト云リ。

② 而ニ応神天皇崩御時、此書ヲ深ク信シ思食、此書世ニ残シナハ、後生輕<sub>レ</sub>之コトヲ歎給テ、我身ノ中ニ納テ末代国家ヲ守リ、民ヲ扶ケ軍神ト成テ、武ヲ守ンニハ不<sub>レ</sub>如トテ、此書ヲ腹内ニ納給ヌ。仍、八幡大菩薩ヲ兵具等ノ上名号ヲモ書付、取分軍配ニ奉<sub>レ</sub>崇此故也。

#### 第三段

① 然ニ、人王六十代ノ皇醍醐天皇御宇ニ、諸事古ノ事今ニアリ。而ニ此一巻ノ書ノ兵書絶タルコト歎思召テ、大江惟時卿、其時

ハ左大弁ノ宰相ニ任セシヲ、砂金十萬兩ヲ給テ持シテ異朝ヘ遣ス。延長元年癸未五月十三日<sup>（ミ）</sup>、纔<sup>（ともづな）</sup>ヲ難波津ニ解テ、同八月上旬ニ渡唐シ給フ。

② 所持ノ砂金異朝帝ニ上ル。此趣ヲ奏聞ス。于時、帝ヨリ明州ノ龍取公ニ勅命シテ、惟時朝臣ヲ付シメ悉ク習伝テケリ。而ニ龍取公五萬兩砂金ヲ得ト云々。

③ 惟時卿此一巻ノ書相伝了テ、我朝ノ朱雀院ノ御宇、承平四年甲午正月廿五日ニ帰朝ス。自<sub>レ</sub>是本朝ノ重宝ト作り、別テ当家ノ重事トシテ相伝シ給フ也。

#### 第四段

○ 然ニ東夷蜂起ノ間ニ為<sub>レ</sub>誅、源義家朝臣ニ被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>勅、発向之時、大江匡房卿ニ付テ此秘術ヲ訴訟シ可<sub>二</sub>相伝<sub>一</sub>之由儀定之時、義家重テ云、我幼少ヨリ弓馬ヲ為<sub>レ</sub>業ト、兵杖ヲ為<sub>レ</sub>芸、無<sub>二</sub>蚩雪之功<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>文字<sub>一</sub>甚愚也。唯仮名ニ和シテ教玉ヘトアリシカハ、匡房任<sub>二</sub>所望<sub>一</sub>、從テ<sub>二</sub>之和字<sub>一</sub>、承暦二年丙午三月十二日、此書カナニ写ト云也。

現存の最古の注釈書は、京都六波羅奉行、斎藤唯浄（基茂）の正応二年（一二八九）の奥書がある「唯浄裏書」である。室町時代には注釈家は、武家側の斎藤・飯尾両氏と、公家で明経道家の清原氏の三流があった。清原氏の家説の集大成は、天文三年（一五三四）の宣賢の「式目抄」である。飯尾家の注釈書は現存しない。

「岩崎本」は、書風、墨色、紙質等から考えて天文年代をくだらないとされ、池内氏は「岩崎本」の解題で、「斎藤家説を伝える式目注釈書の一本」としている。つまり、武家側の注釈書である。

『太平記』の記事、「池辺本」、「岩崎本」の共通の特徴は、『古事記』や『日本書紀』の神功皇后とは関連なく、虚構の上に虚構が重ねら

れている点にある。その結果、『太平記』と注釈書では、明らかに大きな差異が生じるようになった。第一は、神功皇后の関与の仕方にあり、『太平記』では神功皇后が人物を唐に派遣したとする。しかし、注釈書では、「履陶公」なる人物が、「張良一卷書」を「伝来」したとなっている。第二は、大幅な後日談が添加されていることで、唐派遣時の「沙金三万両」持参説が、大江維時の「砂金十万両」持参説に変容している。

「池辺本」と「岩崎本」では、内容が添加されている方が新しいと見るのが妥当であろうから、「池辺本」より「岩崎本」が新しい。ここに説話の誕生とその変容の過程を示す一つの典型を見ることができる。

## 第二章『兵法靈瑞書』

### 1) 『兵法靈瑞書』の「兵法秘術書」

応永二十六年（一四一九）の奥書がある『兵法靈瑞書』<sup>(8)</sup>がある。この中に、「黄石公授子房公一卷書」とする「兵法秘術書」がある。これは「池辺本」や「岩崎本」と同様、「張良一卷書」入手譚であるが、序段が別にある。その序段の中で、

夫、張良一人、神翁三度ノ履ヲ与ル故ニ、其志ヲ感シテ、此一卷ノ術書ヲ与ヘ畢ス。

と、『史記』とは違い「三度ノ履」としている。次いで、

黄石公ハ麻利支天垂迹ナリ。子房公妙音并化現ナリ。彼云、是云、豈ニイルカセナランヤ。抑、此書アマタノ異説多シ。或云、大公<sup>(六朝)</sup>リクタクウヲ以、張良一卷書ト称シ、アルハ又、陳石公<sup>カ</sup>素書ヲシテ黄石公カ兵法書ト号ス。アルハ三略ヲ一卷書ト云トモ、是皆正義アラス。虚説浮言也。

と、「アマタノ異説」が存在したこと、つまり、「張良一卷書」流布の事実<sup>(9)</sup>に言及している。

### 第一段

○ 此書、我朝<sup>テ</sup>渡リシ事、人王十五代皇帝、神功皇后宮元年<sup>辛巳</sup>六月三日、履道公<sup>ト</sup>云シ人、異朝<sup>ヨリ</sup>伝来<sup>シカハ</sup>、帝習<sup>イ</sup>給<sup>テ</sup>、其後、此法力<sup>ヲ</sup>以、先帝仲哀<sup>ニ</sup>ナヒカシカタカリシ三韓ナントヲモ、打随<sup>テ</sup>給<sup>テ</sup>、

### 第二段

○ 治世六十年<sup>ノ</sup>後、太子応神天皇御代<sup>ヲ</sup>譲<sup>リ</sup>奉給時、此書ヲモ同<sup>ク</sup>副<sup>エテ</sup>讓奉<sup>リ</sup>給程<sup>ニ</sup>、応神天皇此書ヲ執<sup>シ</sup>思食<sup>シテ</sup>、世ニ残留、自世<sup>ニ</sup>広<sup>コリ</sup>テ、輕方<sup>ニ</sup>哉<sup>ラ</sup>ントテ、崩御<sup>ノ</sup>時、我身中<sup>ニ</sup>納<sup>テ</sup>、末代<sup>ニテ</sup>国<sup>ノ</sup>宝<sup>ト</sup>成<sup>シ</sup>、人守<sup>リト</sup>セント担給、塔<sup>ニ</sup>入給<sup>シ</sup>ヨリ、此書世<sup>ニ</sup>広<sup>リテ</sup>、輕方<sup>ニ</sup>哉<sup>ラ</sup>ン行、崩御<sup>ノ</sup>時、我永<sup>ク</sup>絶<sup>ニ</sup>ケリ。此故<sup>ニ</sup>八幡大井ヲハ軍神<sup>ト</sup>称<sup>テ</sup>、旗カシラニモ書<sup>テ</sup>付奉ルナリ。

### 第三段

① 然<sup>ル</sup>人王六十代御門、醍醐天皇御宇ニ、我朝<sup>ニ</sup>古<sup>ク</sup>有<sup>シ</sup>事ノ、今ハ絶<sup>ル</sup>変<sup>ヲ</sup>歎<sup>キ</sup>思食、大江維時朝臣、未左大弁宰相<sup>ナリシ</sup>ニ、沙金十万両ヲ持<sup>タセテ</sup>異朝<sup>ニ</sup>遣<sup>ス</sup>。

② 延長元年<sup>癸未</sup>五月十二日<sup>己巳</sup>、共綱<sup>ヲ</sup>博多<sup>ノ</sup>津<sup>ニ</sup>トキテ、同年八月大唐明州津付<sup>ス</sup>。所持<sup>ノ</sup>所十万両<sup>ノ</sup>沙金<sup>ヲ</sup>、五万両<sup>ヲ</sup>帝<sup>ニ</sup>奉<sup>テ</sup>、意趣<sup>ヲ</sup>奉聞スル時、龍取公<sup>ニ</sup>勅<sup>ヲ</sup>下サレテ、維時<sup>ニ</sup>習<sup>ハシメ</sup>給<sup>フ</sup>。

③ 悉<sup>ク</sup>受持<sup>ノ</sup>五万両<sup>ヲ</sup>龍取公<sup>ニ</sup>与<sup>テ</sup>、我朝<sup>ニ</sup>承平四年<sup>甲午</sup>七月<sup>ニ</sup>帰朝セシヨリ以来、惣<sup>シテ</sup>朝家<sup>ノ</sup>重宝、別<sup>シテハ</sup>当家<sup>ノ</sup>重事<sup>トシテ</sup>相伝スル所<sup>ナリ</sup>。

### 第四段

① 而<sup>ヲ</sup>東夷蜂起間、西王<sup>ヨリ</sup>誅放スベキ

(8)「日本兵法全集」第六卷、『諸流兵法(上)』(人物往

来社)に、平仮名で翻刻されている。

ヨシ、源頼義・同子息義家等<sup>ニ</sup>勅<sup>ヲ</sup>下サル時、此<sup>ノ</sup>秘術書<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>伝由、ネンコロニ所望ス。雖<sup>ニ</sup>其謂有<sup>ニ</sup>依<sup>ニ</sup>難儀<sup>ニ</sup>天奏<sup>ヲ</sup>経<sup>テ</sup>天氣<sup>ニ</sup>乗ラシテ、男山<sup>ノ</sup>八幡宮<sup>ニ</sup>相伝スベキ由、鈴掌セラル<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>、

② 義家等重<sup>ネテ</sup>云ハク。愚身、幼ナキヨリ生<sup>リ</sup>弓馬家<sup>ニ</sup>兵杖<sup>ヲ</sup>先<sup>トスル</sup>故<sup>ニ</sup>、螢雪<sup>ノ</sup>勤<sup>メ</sup>ヲイトナマス。仍、鳥跡<sup>ノ</sup>道<sup>ニ</sup>ウトキ故<sup>ニ</sup>真名<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>学。仮名和ケテ願<sup>ハ</sup>教<sup>ヲ</sup>給ヘト、所望<sup>ノ</sup>旨<sup>ニ</sup>任<sup>セテ</sup>、承暦二年<sup>丙午</sup>三月十二日漢字<sup>ヲ</sup>和字<sup>ニ</sup>模<sup>シテ</sup>授<sup>シ</sup>所<sup>ナリ</sup>。

とあって、この「兵法秘術書」が「岩崎本」と同じ系列にあることがわかる。

## 2) 「兵法秘術書」と川瀬論文

『兵法靈瑞書』（以下、『靈瑞書』）は、奈良・吉野の吉水神社が所蔵している。「兵法秘術書」の前に、「兵法相伝具足事」と「兵法成就頓法次第」があり、「兵法秘術書」のすぐあとは、「第一、軍場出作法事」から、「第四十二、其大將軍タラン時歩兵ヲ進退秘術事」までの、「四十二箇条」があり、次の奥書が続く、

兵法靈瑞書全巻

…略…。此書、自<sup>ニ</sup>三浦大多和禪門之許<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>相伝<sup>ニ</sup>也。可<sup>レ</sup>秘<sup>ニ</sup>。

于<sup>レ</sup>時、正平十四曆仲秋下旬廿五日書写畢。

是則其器量拔群之上、所望懇切之間、所<sup>レ</sup>授<sup>ニ</sup>用吉田禪覺房頼智<sup>ニ</sup>也。…略…

正四位上行神祇権大副大中 朝臣定英

とあって、大中臣朝臣定英が三浦大多和禪門から相伝されたものを、吉田禪覺房頼智に与える

ため、正平十四年（一三五九）に書写したものである。更に、

○「兵法手継」

○「素書手継」

○「日本手継」

○「素書王者一射注解 陳石記之」

と続き、巻末の奥書に、

……略……

相佛持主 金剛仏子嚴快（梵字）

可<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>錦袋七重裏<sup>ニ</sup>者歟

応永廿三天<sup>丙申</sup>九月廿一日

応永廿六<sup>亥</sup>八月十六日 相伝正塘

……略……

とあって、金剛仏子嚴快所持の『靈瑞書』全体を、応永二十六年（一四一九）、正塘に相伝されたものと理解できる。

川瀬一馬氏<sup>(9)</sup>はこの『靈瑞書』について、まず、「応永書写の直接の原本は、……正平年中の写本」とする。次に、「武威赫々たる武門の名家に相伝」されたとする理由を、「日本手継」、つまり相伝の系図に、「義家初め頼光・頼政・義経等、兵法に由縁ある源家の名将」をあげている点に求め、「又本書の成立年代も、……鎌倉極末期から南北朝初期頃のもの」と推定されたとしている。

これを検討してみよう。「池辺本」四段に、「源義家大將軍タリシ時、此書ヲ相伝アルニ、文字ニ叶ハス。其時、大江匡房卿ニ仮名ニ書テ、相伝アル也」とある。これによると、源義家が「文字ニ叶ハス」によって、匡房が「仮名」になおし、相伝したという。

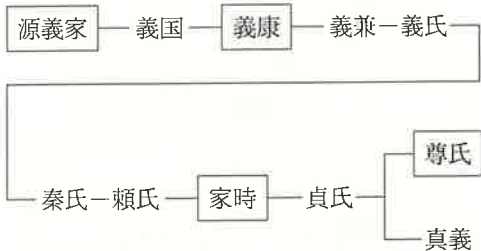
「岩崎本」四段では、「東夷蜂起」が添加され、源義家が「我幼少ヨリ弓馬ヲ為<sup>レ</sup>業ト、兵

(9)川瀬一馬「吉野山吉水神社の応永鈔本『兵法靈瑞書』に就いて」、『図書館雑誌』昭和十四年八月、日本図書



杖ヲ為<sub>レ</sub>芸、無<sub>レ</sub>蚩雪之功<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>文字<sub>一</sub>甚愚也」といったとされ、義家が「仮名ニ和シテ教玉ヘト」と、匡房に依頼したとある。「兵法秘術書」四段では、「真名ヲ不<sub>レ</sub>学」とする。

この八幡太郎義家のどこに、「源家の名将」像を読み取ることができるであろうか。ここには、「無教養」で「卑屈」な義家像しかない。源義家は、足利尊氏の直系の祖にあたる。足利氏は、義家の孫・義康が下野国（栃木県）足利荘に居を定め、足利氏を称したことに由来する。



「鎌倉極末期から南北朝初期頃」とは、まさに、足利尊氏が、元弘三年（一三三三）四月、北条政権に反旗をひるがえし、鎌倉幕府が打倒された時期であり、建武三年（一三三七）、後醍醐天皇に勝利を収め、十一月「建武式目」を制定し、足利幕府を発足させた時期である。

足利尊氏にとって、源義家は「天下取り」の源泉であった。今川了俊の『難太平記』<sup>(10)</sup>に、されバ又義家の御置文に云、我七代の孫に吾生替りて、天下を取べしと仰せられしハ、家時の御代に当たり。猶も時、不<sub>レ</sub>来事をしろしめしければにや。八幡大菩薩に祈申し給ひて、我命をつづめて、三代の中にて、天下をとらしめ給へとて、御腹を切給ひし也。其時の自筆の御置文に子細ハみえし也。とあるように、義家は、七代あとの孫に生まれかわり天下を取る、との「御置文」（遺書）を

残した、という。七代目の家時は成就できず、「三代」で「天下取り」を祈念した「御置文」を書き、切腹した。

この二つの「置文」については、

まさしく両御所（尊氏と直義）の御前にて、故殿も我等なども拝見申したりし也。今天下を取事、唯此発願なりけりと、両御所も仰せ有し也。

とあるように、尊氏や直義も「拝見」しており、「天下取り」が、義家や家時の「遺言」であったことを、強調している。

このように、「義家」は足利尊氏等にとって、精神的シンボルとして存在した。「鎌倉極末期から南北朝初期」こそ、「義家」が政権奪取の象徴として想起された時代であった。つまり、「張良一卷書」伝来譚の「義家」像とは、もっとも「縁遠い」時期であって、成立はこの時期ではない。

「兵法秘術書」は、まず「張良一卷書」伝来譚があって、ただちに「第一、軍場出作法事」をはじめとする「四十二箇条」がつづく。まさに「四十二箇条」が「張良一卷書」と一体のものとして取り扱われている。ところで、「池辺本」の四段に、

……其時、大江匡房卿ニ仮名ニ書テ、相伝アル也。ソレヨリ、仮名カキニテ、四十二ケ條ノ大事ト云ヘル。是歟。

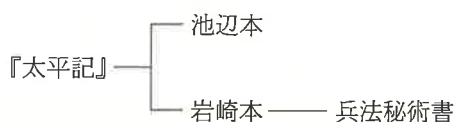
とあって、これは「張良一卷書」伝来譚と「四十二ケ條」が、もともと別個であることを示したものである。つまり、正平十四年の奥書は、「張良一卷書」伝来譚とは関係なく、「四十二箇条」に付いていた奥書なのである。

また、「兵法秘術書」には別に「序段」があり、いろいろな「呼称」に言及する。「陳石公カ素書ヲシテ、黄石公カ兵法書ト号ス」を例にすると、「素書王者一射注解 陳石記之」を別に

(10)『難太平記』、『群書類従』第二十輯、続群書類従完

掲載しており、これは「兵法秘術書」（「張良一卷書」）が「四十二箇条」である立場で、これ以外の呼称の否定材料として、掲載したものと理解できるから、「序段」は、応永二十六年時の観点を示したものとして、間違いなからう。筆者は、相伝された正塘ということになる。

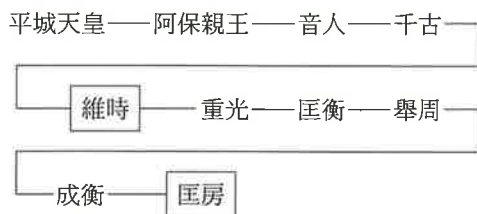
「張良一卷書」伝来譚は、内容の増加から、次の系統が考えられる。



「兵法秘術書」が、『兵法靈瑞書』の巻末の奥書から、応永二十六年（一四一九）の存在が確認されるから、「惟時」譚や「義家」譚の創作と挿入は、『太平記』が成立した応安四～五年（一三七一～二）以降、おそらくは、室町時代に入ってからであろう。

### 3）大江氏系図成立の検討

『統群書類従』第七輯下に、二つの「大江氏系図」（以下、「系図」A・「系図」B）と、「大江氏系図本」（以下、「別本」）がある。この「系図」Bによれば、



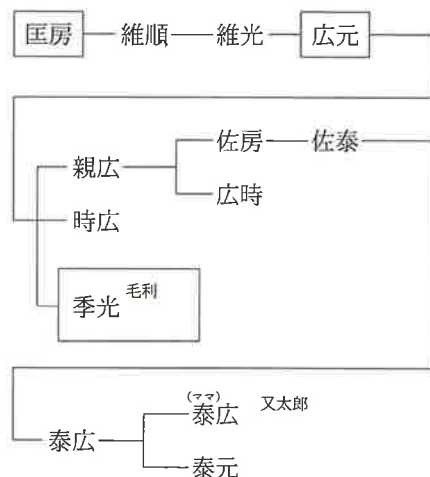
とあり、「維時」の割注に、

延長元年五月入唐。七書軍勝聞伝授。朱雀院御宇承平帰朝。同五年始誦文選。

とあり、「匡房」については、「系図」A・Bと

もに、

白川院御宇、承暦三年三月十二日、於石清水八幡宝殿、八幡太郎義家相伝三略とある。「系図」Bはつづいて、

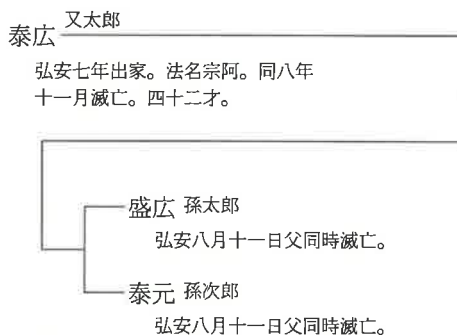


とあり、子の太郎の「泰広」の方に、

弘安七年出家。法名宗阿。同八年十一月滅亡。四十二才。

とあることから、『群書解題』<sup>(11)</sup>は「系図」Bを「鎌倉時代の成立らしい」とするが、この解題に依拠すれば、大江維時の延長元年（九二三）入唐譚や、「七書軍勝聞」伝授譚等が、鎌倉後期には存在していたことになる。この点を検討して見よう。

「系図」Aには、



(11)『群書解題』系図部、統群書類従完成会



とあり、「系図」Bと全く異なる。「別本」の「泰広」には、

弘安八・十一・十七、奥州禅門討死。廿二才。又太郎。

とあって、これらの系図相互に、相当な錯乱があることがわかる。

『群書類従』第五輯の「大江氏系図」によれば、「広時」の子孫「時氏」のとき、「寒河江氏」となっており、後裔の「広直」に「永正元卒」とあって、永正年中（一五〇四～二〇）の成立と見られる。「別本」また同じく「広直」に、「永正<sup>（マ）</sup>卒」とあって、永正年後まもなくの成立であろう。「系図」Aの最後「忠継」に、「元和七年（一六二一）二月廿日死」とあって、『群書類解題』では「江戸時代の初世」の成立とする。このように「系図」B以外は、室町後期から江戸初期の成立である。こうして見ると、「泰広」の弘安期の生存は認められるとしても、「系図」Bを直ちに鎌倉期成立とするには、躊躇される。

「系図」Bの「維時」には、「延長元年五月入唐」とあり、「七書軍勝聞伝授」とあったが、群書類従本「大江氏系図」の「維時」には、

延長年中入唐。逢<sub>レ</sub> 明列竟頌<sub>レ</sub> 勤<sub>レ</sub> 学三略骨法。而後帰朝。

とあって、延長年間とあり、「三略骨法」とする。「武経七書」とは、『孫子』・『呉子』・『尉繚子』・『司馬法』・『六韜』・『三略』・『李衛公問对』のことである。

室町期成立の「池辺本」・「岩崎本」・「兵法秘術書」の中の「維時」には、「七書」に関する記事は一切ない。「兵法秘術書」序段で、「此書アマタノ異説多シ」とし、

或云、大公<sup>カ</sup>リク<sup>（六韜）</sup>タウヲ以、張良一卷書<sup>ト</sup>称シ、アルハ又、陳石公<sup>カ</sup>素書<sup>ヲ</sup>シテ黄石公カ兵法書<sup>ト</sup>号<sup>ス</sup>。アルハ三略ヲ一卷書<sup>ト</sup>

云<sup>トモ</sup>、是皆正義<sup>ニ</sup>アラス。虚説浮言也。

とあって、既述のごとく序段は、応永二十六年（一四一九）に相伝された「正塘」の記述と思われる、序段の筆者自身、「維時」と「七書」を関連視していなかった。

「系図」A・Bは、大江匡房が石清水八幡宮で、義家に「三略」を伝授した、という。これは、『尊卑分脈』<sup>(12)</sup>・「清和源氏」下・義家に、父・頼義朝臣参<sub>レ</sub> 詣八幡宗廟。於<sub>レ</sub> 社壇、賜<sub>レ</sub> 三寸靈剣<sub>レ</sub> 之由、蒙<sub>レ</sub> 感夢之告。……自<sub>下</sub> 蒙<sub>レ</sub> 彼靈夢<sub>レ</sub> 之月<sub>上</sub> 妻室懐胎、即令<sub>レ</sub> 出<sub>レ</sub> 生男子<sub>レ</sub> 畢。今義家朝臣是也。仍七才春、於<sub>レ</sub> 祖神社壇<sub>レ</sub> 依<sub>レ</sub> 加<sub>レ</sub> 首服<sub>レ</sub> 号<sub>レ</sub> 八幡太郎<sub>レ</sub> 云々。

とある八幡太郎の名の由来譚に結び付け、「石清水八幡宮」を登場させたものである。

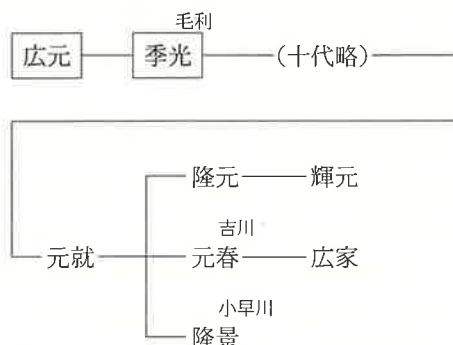
『尊卑分脈』は、永和三年（一三七七）正月以降、応永二年（一三九九）三月以前の成立で、「兵法秘術書」四段にも、「男山ノ八幡宮ニテ相伝ス」とあるから、大江匡房の「三略」石清水八幡宮伝授譚が、応永二年以降、二十六年までにまず成立し、ついで、「維時」の「七書軍勝聞伝授」譚が成立したものであろう。

「大江氏系図」はもちろんであるが、「張良一卷書」成立において、大江氏の関与は疑問の余地のないところであろう。匡房の曾孫に広元がいた。鎌倉幕府の草創期、源頼朝側近には「京下りの官人」、つまり貴族出身の事務官僚群があった。この中で、問注所執事となったのが三善康信であったし、公文所のち改め政所の初代別当が大江広元であった。広元は、頼朝の側近官僚の代表的地位を占め、頼朝死後も、北条政子を補佐し、北条政権で重要な位置にあった。

さて、広元の子に「季光」がおり、「大江系図」Aに、「毛利左近将監・従五位下・安芸守」とあるように、「毛利姓」を称した。この子孫

(12)『国史大系』第三編、吉川弘文館

に、秀吉の朝鮮侵略時、第七軍として参加した毛利輝元・吉川広家がいます。



「張良一卷書」は、他に、「兵法秘術書」・「兵法四十二箇条」・「虎の巻」のように呼ばれている。石岡久夫氏<sup>(13)</sup> 総論に、毛利家本「四十二箇条仙翁一卷書」は、「永正九年（一五一二）文牧伝、永禄七年（一五六四）毛利輝元伝」とある。また、「毛利元侯爵家の伝本は、大江匡房以来源家に相伝した大阿闍利俊在本で、これを巖島東坊の僧教善が毛利元就に献上した」ものとするが、実見していないので、「毛利家本」と「毛利元侯爵家伝本」が同一のものか、そうでないか判断できない。どちらにせよ、毛利家に「張良一卷書」が存在して、一向に不思議でない。

### 第三章 戦国期と江戸初期の兵法思想

#### 1) 上泉流と岡本半助

正徳四年（一七一四）の序のある日夏繁高著『武芸小伝』<sup>(14)</sup> 卷之一・兵法は、

兵法起<sub>下</sub> 鹿島香取神兵・神武天皇平<sub>レ</sub> 不<sub>レ</sub> 順、日本武尊征<sub>二</sub> 東夷、神功皇后擊<sub>中</sub> 三韓。<sub>上</sub>

で始まる。正徳元年の「朝鮮通信使」から三年

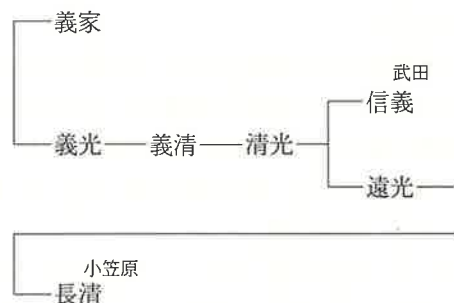
後、兵法の起源に神功皇后の「三韓征伐」が強調された。

岡本半助宣就伝に、「仕<sub>二</sub> 武田家<sub>一</sub> 習<sub>二</sub> 小笠原家訓<sub>一</sub> 関集於上泉常陸介藤原秀胤。」とあり、次の「古伝」を引用する。

古伝曰、醍醐帝の時、大江維時入唐して六韜三略軍勝図四十二条を得て帰朝す。甚秘而人に伝へず。和字の書を作て訓閲集と号し世に伝ふ。其書すへて百二十巻あり。

とある。

佐藤堅司著『日本武学史』<sup>(15)</sup> で、上の「古伝」の内容に続いて、「その後、源義家は、後冷泉天皇に奏して江家の兵法を得て家宝にしたいと歎願し、大江匡房は止むなく、白河天皇の御代八幡大神の廟前において諸葛亮の八陣を義家に伝へ、義家の弟新羅三郎義光もその法を受け、相伝して武田家の家宝となったといふ説」があるとしている。



岡本半助が仕えた武田家は、義家の弟・新羅三郎義光の後裔を称したが、岡本半助が伝授された兵法は、『上泉流軍配正脈』<sup>(16)</sup>（以下、『正脈』）によれば、同じく義光の後裔を称す「小笠原流兵法」の流れをくむ「上泉流兵法」であった。

小笠原流兵法は、室町末期に小笠原氏隆に集

(13)前掲書、『諸流兵法（上）』総論

(14)改定『史籍集覧』第十一冊、臨川書店

(15)佐藤堅司『日本武学史』、大東書館、昭和十七年

(16)前掲書、『諸流兵法（上）』

約され<sup>(17)</sup>、『正脈』付の系図によれば、天文元年（一五三二）、氏隆より上泉（藤原）信綱に伝授された。信綱は、第十三代将軍・足利義輝の「師範」であったという。上泉流兵法は、この信綱に始まる。岡本半助は、信綱の子・秀胤より、慶長七年（一六〇二）に相伝されたという。

『正脈』は、寛永十六年（一六三九）の奥書をもつ。これに、

然此法、本朝從來之始、人皇十有六代応神天皇朝、謂<sub>レ</sub> 履陶公<sub>一</sub> 者、<sup>（一説阿知）</sup>持<sub>レ</sub> 六韜三略兵図、來朝而授<sub>レ</sub> 天皇。天皇秘<sub>レ</sub> 焉。晏駕之時、焼飲<sub>レ</sub> 之。誓成<sub>レ</sub> 末世之軍神。依<sub>レ</sub> 之、此書不<sub>レ</sub> 伝<sub>レ</sub> 世。

とあり、基本的には「張良一卷書」と「大江系図」の混合の上に成立したものである。「訓閱集」は、大江匡房が百二十巻に編集したとしている。

## 2) 越後流兵法と「義経軍歌」

武田信玄と上杉謙信は、天文二十二年から天正元年（一五五四～七三）までの二十年間、甲信越の山野をめぐる、戦いを展開した。特に、川中島の合戦はよく知られている。

武田信玄を流祖とあおぐ兵法を「甲州流」といい、上杉謙信を流祖とする兵法を「越後流」といった。江戸時代に入って、越後流の流派に、要門流・宇佐美流・神徳流が起こった。要門流の「兵法相承」は、次の通りである。

上杉謙信——加治景英——景治——  
——景明——沢崎景実

沢崎景実が延宝七年（一六七九）に著わした

『要門軍命根』<sup>(18)</sup> に、「日本伝」について、  
景行天皇御宇日本武尊立<sub>レ</sub> 主将命<sub>一</sub>、而征<sub>レ</sub> 東夷。此時授<sub>レ</sub> 賜帝典尊。武内宿祢叙<sub>レ</sub> 一武者官<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub> 勅撰<sub>レ</sub> 旧典。乃日本伝是也。

とし、ついで、「御所伝」について、

神功皇后之御宇、自<sub>レ</sub> 百濟<sub>一</sub> 貢<sub>レ</sub> 奉訓閱集。上皇親伝而数閱<sub>レ</sub> 之。故此法謂<sub>レ</sub> 御所伝<sub>一</sub> 矣。

とする。また、

神功治天丁卯四朔、自<sub>レ</sub> 百濟国<sub>一</sub> 貢<sub>レ</sub> 捧訓閱集八十卷。奉<sub>レ</sub> 表演<sub>レ</sub> 其瑞祥、鬼怪神術也。明年西蕃來聘。帝親伝<sub>レ</sub> 焉。自<sub>レ</sub> 是、和漢兵道相並、造<sub>レ</sub> 軍司長<sub>一</sub> 而直<sub>レ</sub> 守斎幢殿。

とあって、神功皇后の時代、百濟『訓閱集』八十巻朝貢譚を創作している。「後漢伝」については、

醍醐天皇御宇、遣<sub>レ</sub> 江維時於異朝、而読<sub>レ</sub> 兵書。駐<sub>レ</sub> 漢七年。伝<sub>レ</sub> 得圯上一遍<sub>一</sub> 而帰。是謂<sub>レ</sub> 後漢伝。

とする「圯上一遍」とは、黄石公が土橋で与えた兵法書を指している。

日本伝・御所伝・後漢伝を「三伝兵道」というが、これについては、

宇野三郎勝親御所伝。宇佐美民部少輔直澄後漢伝。加治前遠江守景員日本伝。代々相繼而為<sub>レ</sub> 家伝之勤職<sub>一</sub> 矣。

とあって、神功皇后の時代に伝えられた「御所伝」は、上杉謙信の家臣の宇野三郎勝親に継承されたという。

このように、上杉謙信の流れをくむ要門流・宇佐美流は、自己存在かつ伝統の根源を「三伝兵道」におき、兵法思想の根幹を貫くものと位置づけされた。

宇佐美流では相伝の際、免許状のほか、伝授

(17) 前掲書、『諸流兵法（上）』総論

(18) 「日本兵法全集」第二巻、『越後流兵法——謙信流

書があった。その中に『義経軍歌』<sup>(19)</sup> があった。副題を「軍法和歌并義経伝」とする。「軍法和歌百首」成立の由来を次のように記す。先祖頼義・義家が、「前九年の役」と「後三年の役」の次第を六巻の「軍物語」にまとめ、それに義経が六巻を追加し、「十二巻の草子」と称した。これを源頼朝に献上し、頼朝が百首を書き出したものとする。

この『義経軍歌』に、康永元年（一三四二）や応永三年（一三九六）の奥書があるが、この奥書は信じられない。偽書である。最後の奥書、正徳四年が成立にもっとも近いものであろう。「義経伝」は次の文で始まる。

夫、兵書は本朝従来の始、人王十四代の帝仲哀天皇と申奉るは、日本武尊第二の御子にてまします。異国追討の御志あるに依て、修束と云唐人を語ひ、三略を得たまひ、昼夜肺肝を砕き之を勤習ひ、余に秘して焼て灰となし服し玉ふ。

とあり、つづいて、

十六代応神天皇と申奉るは、仲哀の太子、母后神功皇后、三略の精水より生れたまふにより、勇武如<sub>レ</sub>神。御治世の間、是又三略を秘寵したまひ、崩御の時、吾末世の軍神と成んと誓ひたまひ、三略を焼て服した

まふ。

とあって、これまた、「張良一卷書」の延長上にあることがわかる。

## 終章 執筆の目的

室町時代から江戸時代までの四百数十年間の朝鮮と日本の関係を、豊臣秀吉による朝鮮侵略の「一時期」を除外して、「善隣と友好」の時代と定義する史観がある。

室町時代を「善隣と友好」の時代とする史観については、拙稿「南北朝・室町期における朝鮮観の中心思想」<sup>(20)</sup> において批判した。この論文の中で、豊臣秀吉の朝鮮侵略が、「善隣友好」の中で生じた「突然変異的」事象でなく、「南北朝や室町期を通じて形成された歴史意識に立脚して起こされた」ものであり、「南北朝・室町期の連続性の上で、統一的な解釈が可能」である、と問題提起した。

本稿は、この問題提起を意識し、兵法思想に着目し、室町時代から江戸初期にいたるまで、南北朝期の「張良一卷書」譚の変容と受容を通して、検証してみようとするささやかな基礎作業である。

(19)前掲書、『諸流兵法（上）』

(20)拙稿「南北朝・室町期における朝鮮観の中心思想」、

『東アジア研究』第6号、大阪経済法科大学・アジア研究所